

〈学術論文:原著〉

レクリエーションの専門志向化過程からみたウィンドサーフィン行動 ——レジャーの社会的世界におけるフィールドワークを通じて——

二宮浩彰* 菊池秀夫** 守能信次**

Behavior Patterns of Windsurfers along with a Developmental Process in Recreation Specialization:
——A Fieldwork Study on Leisure Social World——

Hiroaki NINOMIYA* Hideo KIKUCHI** Shinji MORINO**

Abstract

Recreation specialization is a concept explaining the developmental process of behavior patterns whereby recreation participants acquire knowledge and skills and progress to higher stages of involvement in a particular leisure activity over time. Bryan(1977) defines recreation specialization as "a continuum of behavior from the general to the particular, reflected by equipment and skills used in the sport and activity setting preferences". The purpose of this study is to examine the behavior patterns of windsurfers using a conceptual framework of recreation specialization. Fieldwork research approach was employed and data were collected with the use of participant observation, interviewing, key informants, and documents. The framework of analysis regarding windsurfers' behavior patterns included four dimensions: participation, equipment, skill, and centrality. Findings from this study suggested that the windsurfers were differentiated in terms of skill, frequency of participation, and types of activity. Four types of recreation participants were identified: occasional windsurfer, social windsurfer, competitive windsurfer, and pleasure windsurfer. It was also found through a fieldwork study that windsurfers had changed behavior patterns along the specialization continuum.

1. 緒言

レクリエーションの専門志向化は、社会心理学における発達アプローチ (development approach) をレジャー行動研究の領域に導入したことによって考え出された概念枠組みである¹⁾。専門志向化の概念を提唱したBryan²⁾は、レクリエーション参加者が時間の経過とともにレジャー活動への関与を高めていくことによって、個々人が行動様式において発達過程をたどる

ことを仮定した。その専門志向化過程においては、レジャー活動に取り組み始めた初心者が、使用する用具を取り揃え、必要な技能を習得し、活動する場所を選択して取り組むようになり、このような経験を重ねていくことで熟練者になっていく、というキャリアがみられる。すなわち、専門志向化とは、「スポーツで使われる用具や技能、そして活動場面の選好によって反映される、一般から特殊に至る行動の連続体である」³⁾

*大分大学経済学部 Oita University, Faculty of Economics

**中京大学体育学部 Chukyo University, School of Health and Sport Sciences

(受理日：2004年12月4日)

と定義されているように、レクリエーション参加者の行動様式における発達過程を提示した概念である。レクリエーション参加者は、専門志向化過程をたどることによってレジャー活動に対する態度や価値観を形成し、それぞれのステージに応じた行動様式でその活動に取り組むようになる。この概念枠組みは、専門志向化過程におけるステージの違いによって参加者を類型化し、野外環境に対して異なる期待や欲求をもつ下位グループごとのレジャー行動を把握することに役立てられてきた（研究動向と方法論の詳細についてはレビュー研究¹⁵⁾を参照のこと）。

1977年にBryan²⁾が専門志向化の概念を提唱して以来、理論的に裏づけられた概念枠組みが多くの実証研究に採用され、レジャー行動を理解することに貢献してきた。最近になって、専門志向化の概念および理論的応用を再考したBryan³⁾は、レクリエーション参加者のキャリアが変化してきていることについて意見を述べている。Scott & Shafer²⁰⁾は、研究動向の批評的考察を行い、専門志向化過程における関与ステージ、キャリア変化、そして転換期について吟味した。このレビュー研究をきっかけに、それに対する論評が研究誌上で議論されている。Bryan⁹⁾は、専門志向化過程における前進について取り上げて到達目標とキャリア経路の問題を提議し、レジャー活動の「ジャンプ・スタート(jump-start)」の現象を指摘した。McFarlane¹⁴⁾は、専門志向化過程におけるレクリエーション参加者のキャリアを把握するためには、時系列分析や質的方法によるアプローチが要求されると述べている。Kuentzel¹²⁾は、専門志向化過程を理解するためには、レジャー活動へのコミットメントに影響を与える個人的・社会的要因を分析するべきであると指摘している。以上の評論に対して応答したScott & Shafer²¹⁾は、レクリエーション参加者がたどる専門志向化過程におけるキャリアの変化や前進について解明することが重要であると結論づけている。上述したように、理論の再構築へ向けた展開がみられる専門志向化研究の領域においては、専門志向化過程についての議論が活発化している状況にあり、定性的方法によるアプローチによって専門志向化過程におけるキャリアについて、より理解することが求められている。

以上のことから、本研究では、レジャーの社会的世界においてフィールドワークを実施することによって、

レクリエーション参加者の専門志向化過程を詳細に把握することにした。これまで専門志向化研究においては、フィッシングを対象とした事例研究²⁾をはじめとして多様なレジャー活動種目において知見が蓄積されてきた。それにもかかわらず、参加するにあたって高度な知識と技能の習得や活動への関与が要求されるウインドサーフィンの専門志向化研究が手つかずの状態であり、その専門志向化過程について究明されていない。そこで本研究は、ウインドサーフィンというレジャー活動固有の専門志向化過程を吟味することによって、その行動様式について明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究

(1) レジャーの社会的世界における参加者の類型化

レジャー活動の場面には、「効力のあるコミュニケーションにより成立する文化領域」²²⁾として社会的世界(social world)が存在する。レジャーの社会的世界は、参加者が知覚した関心や関与の領域でつながっている⁵⁾⁶⁾²³⁾。Scott & Godbey¹⁸⁾は、社会的世界を「それぞれ意味をもつ特別な集団で共有されており、活動、出来事、慣例、実践、専門知識、技術、言葉といったさまざまな文化要素が創られて社会的世界の成員により意味づけられている」として総括的に定義づけている。

Bryan²⁾は、専門志向化の概念枠組みを用いて、多様な行動様式で取り組むフィッシング参加者が存在しているレジャーの社会的世界を探索した。そのフィールドワーク研究では、フィッシング参加者を「不定期参加者」、「ゼネラリスト」、「技術のスペシャリスト」、「技術と場面のスペシャリスト」に類型化し、それぞれの行動様式が異なることを検証している。その結果、フィッシング参加者が一般から特殊に至る行動の連続体に配列されて、専門志向化過程におけるステージに応じた行動様式でその活動に取り組んでいることが明らかにされた。この研究成果を踏まえてDitton et al.⁶⁾は、フィッシングの社会的世界を対象とした実証研究において、Unruh²³⁾による「新参者」、「不定期参加者」、「定期参加者」、「部内者」という4類型に従って下位グループに類型化して、専門志向化過程のステージが異なる参加者の行動様式について明らかにしている。また、専門志向化の概念を野外環境以外のレジャー活動に適用したScott & Godbey¹⁹⁾は、ブリッジ参加者

を「トーナメント・プレイヤー」、「定期デュプリケート・プレイヤー」、「定期社交的プレイヤー」、「不定期プレイヤー」に類型化してレジャーの社会的世界を探求している。そのフィールドワーク研究では、それらの参加者が専門志向化過程の連続体をたどるのではなく、異なったキャリア経路を選択することが明らかにされている。

上述した先行研究では、レジャーの社会的世界において類型化された下位グループが専門志向化の連続体に配列されて、そのステージによって行動様式が異なることが検証されてきた。McFalane¹⁴⁾が述べているように、社会的世界におけるレクリエーション参加者の専門志向化過程を把握するには、定性的方法によるアプローチが有効である。フィールドワークから得られた質的データは、専門志向化過程における現象を理解するための内部的な見方による妥当で詳細な情報を生成することができるからである¹⁵⁾。

(2) レクリエーションの専門志向化過程

専門志向化過程を扱った研究においては、レジャー活動の参加者が経験を重ねることで、知識や技能を習得してその活動への関与を高めていくという、行動様式の発達過程を説明することに重点が置かれてきた。

セーリングの専門志向化過程を取り上げたKuentzel & Heberlein¹⁶⁾は、参加形態が異なるヨット参加者が専門志向化の連続体に配列されて、専門志向化過程をたどり前進することを検証している。専門志向化過程の階層モデルを提示したDonnelly et al.⁷⁾によると、セイルボート参加者の場合には、専門志向化過程をたどることが検証されているが、モーターボート参加者の場合には、関与やコミットメントが高まった結果としてレーサーへ前進するというキャリアは認められなかった。また、Scott & Godbey¹⁸⁾は、ブリッジ・プレイヤーが「本格志向」で参加するのか、「社交志向」で参加するのか、を自己規定していることを観察したことによって、多くの社交的プレイヤーが意図的に専門志向化のより高いステージに前進することを拒絶していると結論づけている。

以上のように、専門志向化過程を取り上げた先行研究では、レクリエーション参加者が専門志向化過程をたどり行動様式を変化させていくことが検証されている一方で、より高いステージに前進しないことがあり得ることが報告されている。

3. フィールドワークの方法

現地調査は、別府湾をのぞむ40万㎡の休暇村である住吉浜リゾートパーク（大分県杵築市）内を中心として行った。住吉浜リゾートパークは、遠浅で初心者にとって安全であり、10m/s程度の季節風が安定して吹くことが多く上級者にも人気のある全国的に有名な活動場所である。

フィールドワークの技法は、データの収集、問題の構造化、データの分析という3つの作業が同時並行的に行われる¹⁷⁾。本研究のデータ収集は、Scott & Godbey¹⁸⁾¹⁹⁾によるフィールドワーク研究における混合形式のデータ収集法に準拠して、参与観察、インタビュー、重要な資料提供者、文献を情報源として行った。そして本研究では、どういったタイプのウインドサーフィン参加者がいるのか、という問題を構造化していくことによって類型化した下位グループごとのデータを分析した。具体的には、64名のウインドサーフィン参加者に対して行ったインタビューによるデータを中心に、参与観察において記録したフィールドノーツのデータを加えることによって、ウインドサーフィン参加者の行動様式について分析している。重要な資料提供者からは、データを解釈するためにクラブ事情についての情報を入手した。文献から得た情報は、ウインドサーフィンの動向を踏まえた上で参与観察とインタビューによるデータを裏づけるための補足資料として役立てた。

(1) 参与観察

本研究では、第一筆者みずから積極的な参与者の役割を担って参与観察を実施した。筆者は、「ウインド・アビーム」というウインドサーフィン・クラブのメンバーとして行動を共にすることで、友好的な人間関係（ラポール）を築きながら調査を遂行することができた。当該クラブは、1981年に開店したプロショップ「ウインド・アビーム」および住吉浜リゾートパーク内のショップ「セイルアップゼウス」を拠点としており、ショップ経営者がレース、ツアー、各種イベントを企画してメンバーを統率している。参与観察は1999年7月1日から12月12日までの間に、36日数を現地調査にあてた。筆者は、密接な形で参加した体験や観察された出来事について⁸⁾、その日のうちにフィールドノーツに記録した。その内容は、活動状況、対人関係、集団機能、話題・発言、用具関与、個人経歴、な

どについての質的データである。

(2) インタビュー

筆者は、現地で参与観察と同時に、専門志向化の測定項目を中心に質問内容を半構造化したインタビューを現地調査期間中に実施した。専門志向化の測定項目としては、McIntyre & Pigram¹⁹⁾による包括的な専門志向化モデルを基礎として先行研究およびウインドサーフィンの種目特性を考慮することによって、行動局面として参加次元、認知局面として用具次元と技能次元、感情局面として中心性次元を採用した。インタビューにおけるサンプリング手法は、専門志向化レベルの異なる参加者を均等に抽出することを配慮して、判断サンプリングを用いた。また、雪だるま式サンプリングを採用することで、次の調査対象者を紹介してもらい必要サイズのサンプルを確保することができた。

(3) 重要な資料提供者

重要な資料提供者としては、ウインドサーフィン・クラブ（ウインド・アビーム）のリーダー的存在である参加者とクラブを運営しているショップ経営者を選んだ。2名の資料提供者からは、ウインドサーフィンの現状と課題、クラブ小史、ウインドサーフィン参加者の行動特性についての聞き取りを行った。

(4) 文献

文献調査は、ウインドサーフィンを扱った定期刊行雑誌である月刊『Hi-Wind（マリン企画）』（1990年7月号から1997年12月号、1999年4月号から2000年3月号）、隔月刊『Windsurf club（樫出版）』（1990年9月号から1997年12月号）隔月刊『WindSurfer（樫出版）』（1999年4月号から2000年3月号）を対象としておおそ過去10年間の範囲で実施した。

4. フィールドワークの研究成果

(1) ウインドサーフィン参加者の類型化

ウインドサーフィンの社会的世界においては、同じ態度で行動を共にする参加者が成員として存在しているわけではない。レジャーの社会的世界の観点から取り組んだ先行研究では、フィールドワークにおける参与観察に基づいて、参加状況・技術・場面選好²⁾、参加頻度³⁾、参加状況・活動種目¹⁰⁾というような参加形態の違いによってレクリエーション参加者の下位グループを見極めた上で、それぞれの行動様式について検証している。本研究では、ウインドサーフィン・クラブのメンバーとして行った参与観察とウインドサーフィンの雑誌を中心とした文献調査から得られた情報を踏まえて、参加状況・技能・活動種目の3変数を基準として、ウインドサーフィン参加者を図1のように「不定期参加者」、「社交志向参加者」、「競技志向参加者」、「快楽志向参加者」、といった4つのタイプの下位グループに類型化した。このウインドサーフィンの社会的世界を表した図においては、Bryan²⁾、およびScott & Godbey¹⁰⁾による専門志向化の連続体モデルを継承して、参加者が一般から特殊に至る行動の連続体に配列されることを仮定した。

不定期参加者は、定期的なレジャー活動としてウインドサーフィンに取り組んでいない初心者である。または、ウインドサーフィンへの関心が低いために、たまにしか取り組まない者が不定期参加者に含まれる。それ以外の定期的なウインドサーフィン参加者においては、Scott & Godbey¹⁰⁾が主張しているように、参与観察によって社会的に取り組んでいる者と本格的に取り組んでいる者を容易に見分けることができた。社会的な参加者は、「レースに参加する気はない」「競争するのではなく楽しみたい」「のんびり海で遊びたい」というような発言をしており、ウインドサーフィンに

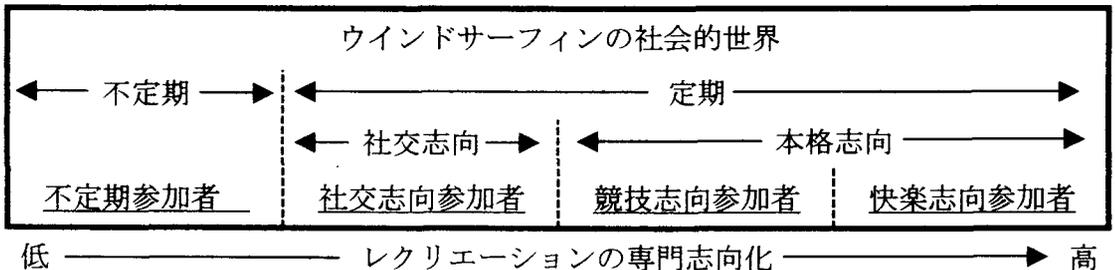


図1 ウインドサーフィンの社会的世界における専門志向化の連続体

表1 4つのタイプに類型化したウインドサーフィン参加者の行動様式

	不定期参加者	社交志向参加者	競技志向参加者	快楽志向参加者
参加次元 経験年数 参加頻度 参加期間	1年未満 数回/年 夏	3年以下・5年以上 1回/週・月 春～秋	1年半以上 2回/週 ほぼ一年中	3年以上 1・2回/週 一年中
用具次元 ボード セイル	所有しない・ロング 1枚	ロング・ショート 2・3枚	主にロング 複数枚	ショート複数艇 多数
技能次元 技能レベル 習得技術 出艇風速	初心者・初級者 セッティング～ 微風～中風	初中級・中級 ～プレーニング 弱風～中風	初級～上級 ハーネス～すべて 微風～強風	中級 すべて 中風～強風
中心性次元 雑誌 専門書 ビデオ 用具投資	購読しない 所有しない 所有しない 初期投資	たまに購読する 所有しない 所有しない 低額投資	購読する 解説書 所有しない 低額・高額投資	購読する 所有しない 所有する 高額投資

本格的に取り組まないことを自己規定していることがわかった。本格的に取り組んでいる参加者については、競技大会に目標を定めていたり²¹⁾、活動に熱中していたりする様子を観察することができた。本格的な参加者は、コースレースに出場して好成績を残すためにロングボードでの練習を中心に行っている競技志向参加者と、ショートボードでスピード感を味わうことによる快感を楽しむことに熱中している快楽志向参加者に分かれる。以上のようにして本研究では、筆者が参与観察を通して参加者の行動や役割から判断した上で、ウインドサーフィンの社会的世界において取り組み方が異なる下位グループを割り出した。

(2) ウインドサーフィン参加者の行動様式

本研究においては、表1に示したように、専門志向化の測定項目として採用した参加次元、用具次元、技能次元、中心性次元という次元ごとに、不定期参加者(10名)、社交志向参加者(18名)、競技志向参加者(13名)、快楽志向参加者(23名)のそれぞれの特徴としてみられたレジャーの社会的世界における事象について記述していく。

1) 参加次元

参加次元は、経験年数、参加頻度、活動期間、レース出場回数、旅行経験といったウインドサーフィン参加者の行動局面である。

不定期参加者は、ウインドサーフィンを始めたばかりの初心者であるか、参加経験を積んでも活動を数ヶ月から数年間の長期にわたり休止することがある

者である。29歳の女性は、ショップが行っている初心者向けの講習を受けていた。ウインドサーフィンのサークルに入部した大学生や、ショップ「セイルアップゼウス」でのアルバイトをきっかけにウインドサーフィンを始めた23歳の男性と21歳・29歳の女性は、先輩や仲間アドバイスをしてもらいながら参加している。

社交志向参加者は、気温・水温が低くなる冬期には活動を休止するが、春から秋までの期間に月に1回から週に1回程度の頻度で活動している。社交志向参加者は、ウインドサーフィンを始めて3年以下の参加経験が短い者と、5年以上の参加経験が長い者の二通りのタイプがみられた。経験年数が短い参加者(27歳と33歳の男性)は、仲間と交流することを楽しみとしており、ウインドサーフィンをしない日にも活動場所に来ることがある。経験年数の長い参加者(経験7年・8年・20年の男性)は、過去にコースレースの競技大会に出場していたり、ウインドサーフィンに熱中していた時期があったりする者である。

競技志向参加者は、コースレースの競技大会に出場することを主目的としており、参加経験が1年半程度の者から19年間にわたって競技大会に出場している者までいた。競技志向参加者には、レースに備えて週に2回以上の高い頻度で練習をしている者が多いが、レースがない期間には参加頻度が低くなったり活動を休止したりする者もいる。

快楽志向参加者は、プレーニングによる高速帆走を楽しむためにウインドサーフィンをしている者である。

プレーニングとは、水面上にボードが浮き上がって高速で滑走することをいう。このスピード感を味わうために、快楽志向参加者は、強風が吹くことが多い秋から冬の寒い時期にも活動しており、1年を通してウインドサーフィンに参加している。コースレースの競技大会には、現在はほとんどの者が出場していないが、過去に多く出場していた者が多い。快楽志向参加者の多くは、3年以上の経験があり週に1・2回程度の高い頻度で参加している。なかには、活動場所に来てウインドサーフィンの準備をするが、中風・強風域の風が吹いてプレーニングを楽しむことができるときにしか出艇しない者もいる。また、風のコンディションが良く海がきれいな沖縄方面やサイパン、グアム、ハワイなどの海外ツアーに参加してウインドサーフィンを楽しんだりする者が多い。

2) 用具次元

用具次元は、所有しているボード、セイル、マスト、ブーム、フィンといったウインドサーフィン用具についての認知局面である。

不定期参加者は、ショップでレンタルをしたり（25歳の男性と29歳の女性）人から借りたり（18歳の男性と30歳・36歳の女性）して活動しているため用具を所有していないか、ロングボードの用具一式を揃えたばかり（20歳・23歳の男性と21歳・29歳の女性）といった状況である。ウインドサーフィンの初心者は、ボードの浮力がなくダガーボードがないという用具の構造的特徴のためにショートボードに乗ることができない。そのため、初心者は、ロングボードから始めることになり、その用具を揃えていくことになる。

社交志向参加者は、ロングボードだけでなくショートボードを使用する者もあり、強風用と弱風用のサイズが異なる数枚のセイルを所有するようになり、それに合わせたマスト、ブーム、フィンを揃えている。40歳の男性と27歳の女性は、幅広いコンディションに対応することができるオールラウンド艇を使用していた。

競技志向参加者は、ワールドカップやオリンピック、国民体育大会で使用が義務づけられている規格のレース用ロングボードを主として所有しており、レースのコンディションに対応するために複数枚のレース仕様セイルを揃えている。競技に専念している25歳・33歳・41歳の男性は、レースに備えてチューンナップをしたり用具の補修をしたりして、メンテナンスに熱心であ

る。

快楽志向参加者は、ボード容積が異なる2艇から8艇のショートボードを所有しており、用具情報を敏感に入手して最新モデルのボードを購入している者が多い。31歳・72歳の男性は、特別注文したカスタムボードを愛用していた。セイルは2枚以上、多い者で6・7枚も所有しており、サイズ別に揃えられている。これらのセイルは風の強さによって使い分けられるが、セイルのサイズに合わせてマストとブームを揃える必要がある。

3) 技能次元

技能次元は、自己申告による技能レベル、習得技術、ボードの経歴といったウインドサーフィン参加者の認知局面である。

不定期参加者は、初心者か初級者であると技能レベルを自己申告しており、ウインドサーフィンの習得技術についてはセッティングが一応できる者からタック、ジャイブ、ピーチスタート、ハーネスワークまで習得している者までいる。出艇する風速は、微風から中風の風域で出艇するとしている。

社交志向参加者は、初中級・中級であると技能レベルを自己申告する者が多い。習得技術はセッティングからプレーニングまでを習得していると申告する者が多いが、経験年数が長く過去にウインドサーフィンに熱中していた者（経験年数7年・8年・20年の男性）はすべての技術を習得していると申告している。出艇する風速は、弱風から中風の風域を好む者が多いが、過去に経験がある者は強風までの風域で活動するとしている。

競技志向参加者は、コースレースの競技大会で上位に入賞している者が中上級・上級であると自己申告しており、下位の成績で止まっている者が初級であると自己申告していることからわかるように、競技大会での成績が技能レベルに反映されている。習得技術については、競技大会に出場するためハーネスワークまで習得している者から、すべての技術を習得している者までみられる。競技志向参加者は、競技大会であらゆる風の状況にも対応するため、風の強弱にかかわらず微風から強風までの幅広い風域でウインドサーフィンの練習をしている。

快楽志向参加者は、中級程度であると技能レベルを自己申告する者が多いが、習得技術についてはほとんど

どの技術を習得していると回答しており、技能レベルの申告と習得技術の回答にギャップがみられる。微風・弱風のときには操作が困難であるというショートボードの特性のため、出艇する風域は中風・強風であり、陸上で風が吹くまで待機する。これを「風待ち」と呼び、このときに仲間とウインドサーフィンの話題で盛り上がることも快楽志向参加者の楽しみとなっている。

4) 中心性次元

中心性次元は、専門雑誌の購読、専門書やビデオの所有、所属クラブや組織、活動費用、自由時間配分といった参加者のライフスタイルにおけるウインドサーフィンの重要性を指す感情局面である。

不定期参加者は、ウインドサーフィン関係の雑誌を購読しておらず、書籍も所有していないことが多い。用具への投資については、初心者が用具一式を揃えた場合に、初期投資として中古艇で10万円から20万円程度、新艇で約40万円という高額の出費をしている。過去に経験がある33歳の男性は、用具を買い換えることをほとんどせずに活動をしている。初心者は、自由時間の配分でウインドサーフィンの比率が高くなっているが、過去に経験のある不定期参加者は他のレジャー活動の比率の方が高くなっている。

社交志向参加者は、ウインドサーフィンの雑誌をたまに購読する者がいる程度であり、専門書はほとんど所有していない。用具への投資については、用具一式を揃えた者は用具を買い換えたりすることなく活動している場合が多い。経験年数7年の男性は、ウインドサーフィンの用具一式を揃えてしまい長く使うことでほとんど費用をかけることなく参加していた。社交志向参加者は、自由時間の配分でウインドサーフィンの比率があまり高くなく、他のレジャー活動をするかウインドサーフィンをするかの選択に戸惑う者もいる。

競技志向参加者は、競技大会の成績が掲載されることから雑誌を購読する者が多い。専門書については、ヨット競技規則（IYRR）や全日本ウインドサーフィン教程といったコースレースに役立つ解説書を所有している。用具への投資については、用具の補充や修理での投資をしているか、ボードやセイルの新規購入で高額の出費をしている場合がある。自由時間の配分については、競技大会に情熱を注いでいる者はウインドサーフィンの比率が10割であると回答している。

快楽志向参加者は、雑誌を定期購読する者が他の参

加者よりも多くなっているが、ほとんどの者が専門書を所有していない。快楽志向参加者の多くは、ウインドサーフィンのパフォーマンスを表現したビデオを所有しており、書籍による解説よりもビジュアルによりウインドサーフィン技術を学んでいる。用具への投資は、最新モデルに買い換える者が多いため年間20万円から50万円程度の出費をしており、38歳の男性は年間約150万円の投資をしている。自由時間の配分については、ほとんどの者がウインドサーフィンに熱中していることから他のレジャー活動の配分は非常に少なくなっており、仕事よりもウインドサーフィンの方が大事という者も少なくない。

5. 結論と今後の課題

本研究では、レジャーの社会的世界においてフィールドワークを行い、ウインドサーフィン参加者の専門志向化過程を定性的方法によって把握した。現地調査は、初心者から上級者まで、またロングボードから最新モデルのショートボードまで使用する、さまざまなタイプのウインドサーフィン参加者がみられる九州地方の活動場所において行った。関東地方のように活動形態が流行の影響を大きく受けて、ショートボードを使用する参加者が中心となっている地域においては、また異なったウインドサーフィンの社会的世界が存在しているであろう。しかしながら、本研究のなかでそれを同時に取り上げることは研究の限界と判断せざるを得ず、その究明は今後の研究に期待したい。

現地調査における参与観察では、歴史が長く活発に活動しているウインドサーフィン・クラブを拠点としてウインドサーフィン参加者を観察することによって、その行動様式について明らかにしてきた。

専門志向化の参加次元では、ウインドサーフィン参加者は専門志向化過程のステージが高くなるほど、参加頻度が高くなり活動期間が長くなり、活動への関与を高めていく傾向がみられた。不定期参加者と社交志向参加者は、気温・水温が温暖な時期に活動を限定しており、競技志向参加者はレースがない期間に活動を休止することがある。快楽志向参加者は風のコンディションが良いときにしか出艇しないが、1年を通して活動場所に来て「風待ち」をしながらウインドサーフィン活動に参加している。

専門志向化の用具次元では、ウインドサーフィン参

加者は専門志向化過程のステージが高くなるほど、ボード、セイル、その他の用具を取り揃えるようになり、用具についての知識が高まり、用具への関与を高めていく傾向がみられた。不定期参加者と社交志向参加者は用具の知識が不十分であるが、競技志向参加者と快楽志向参加者は、用具について豊富な知識をもち、所有している用具についての認知度が高い。ウインドサーフィンというレジャー活動は、専門志向化過程のステージが高くなると、より専門的な用具を多く所有するようになることが顕著に表れていると考えられる。

専門志向化の技能次元では、ウインドサーフィン参加者は専門志向化過程のステージが高くなるほど、高い技術を習得するようになり、技能を高めていく傾向がみられた。競技志向参加者と社交志向参加者のなかには、専門志向化過程のステージが高い参加者よりも高い技能を習得している者がみられた。このことから技能次元においては、Scott & Shafer²⁰⁾が指摘しているように、技能習得の点からだけでなく技能発達の方向づけによって専門志向化過程における前進を考慮する必要がある。

専門志向化の中心性次元では、ウインドサーフィン参加者は専門志向化過程のステージが高くなるほど、雑誌を購読するようになり、ビデオを所有するようになり、用具への投資をするようになり、ライフスタイルでの中心性が高まる傾向がみられた。専門書については、ほとんど所有する者がおらず、競技志向参加者が競技規則を覚えるために読んでいる程度である。初期投資としてウインドサーフィンの用具一式を取り揃えた初心者は、参加経験が低いにもかかわらず、極端に用具への関与が高まってしまう。そのため、専門志向化の参加次元が前進しても用具次元が同じように前進しないという問題は、Bloch et al.¹⁾によるレジャー用具の消費者行動研究においても指摘されており、専

門志向化の測定における課題である。Scott & Shafer²⁰⁾はレジャー活動に関心をもった新参加者が用具に対する重要性を高めるためであると推論しているが、このことはウインドサーフィンの種目特性として考慮すべき問題である。

専門志向化研究においては、レクリエーション参加者がある特定のレジャー活動に関与した結果として、専門志向化過程をたどることによって行動様式を変化させていくことが仮定されてきた²⁾⁶⁾⁷⁾¹³⁾。本研究では、図2に示したように、レジャーの社会的世界においてウインドサーフィン参加者が専門志向化の連続体に配列されることが典型的なパターンとして想定され、「不定期参加者」－「社交志向参加者」－「競技志向参加者」－「快楽志向参加者」という専門志向化過程の高いステージに移行するほど、行動様式の専門志向化が高まっていることが明らかとなった。このような専門志向化の連続体と専門志向化過程についての結論が導き出されたのは、ボードの構造的特性、技能習得の困難さ、ライフスタイルでの中心性の高まり、といったウインドサーフィン固有の要因が影響を及ぼしていると考えられる。

その一方で参加者のなかには、時間の経過とともに専門志向化過程を前進しないウインドサーフィン参加者が存在し、専門志向化過程における途中のステージに停滞したり、以前のステージに後退したりするキャリアがみられた(図2)。Donnelly et al.⁷⁾は、モーターボート参加者がスリルや楽しい時間を求めてレジャー活動に参加するために専門志向化過程をたどらないことを指摘している。また、Scott & Godbey¹⁹⁾は、レクリエーション参加者が社会的参加から本格的参加へ移行することを拒絶していることから専門志向化過程をたどらないと結論づけている。本研究においては、一部の競技志向参加者が、コースレースの成績で上位

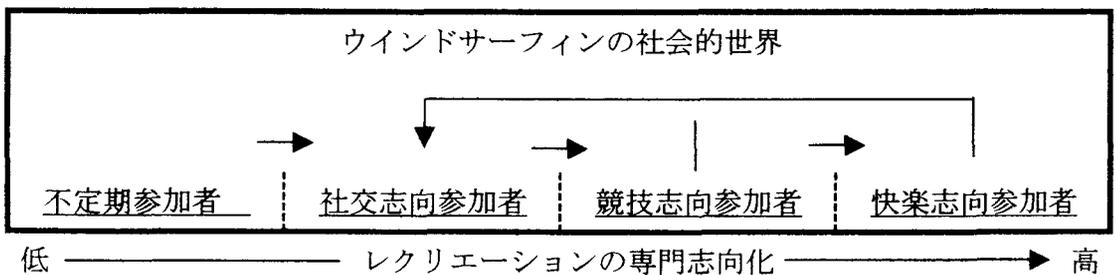


図2 ウインドサーフィンの社会的世界における専門志向化過程

ランキングを維持することを最大の目標にして、長年の間、レースに取り組んでいるためである。また、経験年数が長い社交志向参加者は、過去に競技志向参加者としてレースに参加して、快楽志向参加者としてウインドサーフィンに高く関与していた者が、家庭や仕事の都合で社交志向参加者として参加しているためである。上記の理由から、本研究では、ウインドサーフィン参加者が専門志向化過程の途中のステージに長くとどまったり、専門志向化過程をたどった参加者が再び以前のステージにもどったりすることがあることが観察された。

このような現象については、専門志向化過程におけるキャリアの偶発的問題²⁰⁾として専門志向化研究を行ってきた研究者の間で再考されている。Kuentzel¹²⁾は、現代社会におけるレジャーの商業化やレジャー産業の発展が人々に多くのレジャー機会を提供しており、レジャー活動への参加の軌道 (trajectory) が多様化していることを指摘した。これに賛同したScott & Shafer²¹⁾は、レクリエーション参加者のキャリアがレジャー活動への関与を特徴づける専門志向化の連続体に沿っているとは限らないと警告している。ウインドサーフィン業界においては、用具の改良や開発が急速に進んでおり⁹⁾、従来は中・上級者向けの用具であったショートボードは初心者にも扱い易いモデルが普及しつつある。そのため、ロングボードからショートボードの使用へというキャリアをたどらず、初心者がショートボードを購入してウインドサーフィンに参加することが見受けられるようになってきた。

このようにレクリエーション参加者は、時間の経過により専門志向化過程をたどるとは限らず、途中のステージから始めたり中間のステージを飛ばしたりしてレジャー活動に取り組むことも考えられる⁹⁾。このような複雑な専門志向化過程の変遷を理解するためには、時間の経過に伴い専門志向化の連続体に沿ってレクリエーション参加者が前進したり後退したりする原因となる個人的要因、社会的要因、出来事²¹⁾などを今後の研究においてさらに詳しく検討する必要がある。

註1) 現地調査を行った地域では、ロングボードのコースレースである「西日本ファンサーキット」が競技大会の主であるが、関東地方などの地域では、ショートボードを使用するアップウインドレースやスラローム

の競技大会が盛んである。この地域差によって、ウインドサーフィン参加者の競技大会への係わり方が異なっている。

文献

- 1) Bloch, P.H., Black, W.C. and Lichtenstein, D., Involvement with the Equipment Component of Sport: Links to Recreational Commitment. *Leisure Sciences* 11: 187-200, 1989
- 2) Bryan, H., Leisure Value Systems and Recreational Specialization: The Case of Trout Fishermen, *Journal of Leisure Research* 9: 174-187, 1977
- 3) Bryan, H., Recreation Specialization Revisited, *Journal of Leisure Research* 31: 18-21, 2000
- 4) Bryan, H., Reply to David Scott and C.Scott Shafer, "Recreational Specialization: A Critical Look at the Construct", *Journal of Leisure Research* 33: 344-347, 2001
- 5) Devall, B., The Development of Leisure Social Worlds, *Humboldt Journal of Social Relations* 1: 53-59, 1973
- 6) Ditton, R.B., Loomis, D.K. and Choi, S., Recreation Specialization: Re-conceptualization from a Social Worlds Perspective, *Journal of Leisure Research* 24: 33-51, 1992
- 7) Donnelly, M.P., Vaske, J.J. and Graefe, A.R., Degree and Range of Recreation Specialization: Toward a Typology of Boating Related Activities, *Journal of Leisure Research* 18: 81-95, 1986
- 8) エマーソン, R.ほか: 佐藤ほか訳、方法としてのフィールドノート 現地取材から物語作成まで、新曜社、p.30、1999
- 9) 平野貴也・柳敏晴、ウインドサーフィンにおけるセールの変遷、*スポーツ産業学研究*10(1): 89-103、2000
- 10) 原田宗彦、北米における余暇行動研究の動向、*レクリエーション研究* 9: 35-44、1982
- 11) Henderson, K.A., False Dichotomies, Intellectual Diversity, and the "either/or" World: *Leisure Research in Transition. Journal of Leisure Research* 32: 49-53, 2000

- 12) Kuentzel, W.F., How Specialized is Specialization Research?, *Journal of Leisure Research* 33: 351-356, 2001
- 13) Kuentzel, W.F. and Heberlein, T.A., Social Status, Self-Development, and the Process of Sailing Specialization, *Journal of Leisure Research* 29: 300-319, 1997
- 14) McFarlane, B.L., Comments on Recreational Specialization: A Critical look at the Construct, *Journal of Leisure Research* 33: 348-350, 2001
- 15) McIntyre, N. and Pigram, J.J., Recreation Specialization Reexamined: The Case of Vehicle-Based Campers, *Leisure Sciences* 14: 3-15, 1992
- 16) 二宮浩彰・菊池秀夫・守能信次、レクリエーションの専門志向化：その研究動向と方法論、*体育学研究* 47(4): 319-331、2002
- 17) 佐藤郁哉、フィールドワークの技法 問いを育てる、仮説をきたえる、新曜社、pp.127-151、2002
- 18) Scott, D. and Godbey, G., An Analysis of Adult Play Groups: Social Versus Serious Participation in Contract Bridge, *Leisure Sciences* 14: 47-67, 1992
- 19) Scott, D. and Godbey, G., Recreation Specialization in the Social World of Contract Bridge, *Journal of Leisure Research* 26: 275-295, 1994
- 20) Scott, D. and Shafer, C.S., Recreatinal Specialization: A Critical Look at the Construct, *Journal of Leisure Research* 33: 319-343, 2001
- 21) Scott, D. and Shafer, C.S., A Rejoinder to Reviewer's Comments, *Journal of Leisure Research* 33: 357-361, 2001
- 22) Shibutani, T., Reference Groups as Perspectives, *American Journal of Sociology* 60: 562-569, 1955
- 23) Unruh, D.R., Characteristics and Types of Participation in Social Worlds. *Symbolic Interaction* 2: 115-129, 1979